

論文

## 道綽『安楽集』における難易二行道に関する再考

王 振 賢

〔抄 録〕

本稿では、龍樹、曇鸞の教判思想と比較し、難易二行道における自他二力の内容も含めて検討することによって、道綽の難易二行道判の特徴を明らかにすることを目的とする。従来聖浄二門判は道綽の教判論として広く知られるが、聖浄二門判という言葉は『安楽集』にははっきり見えないのである。では、聖浄二門判を道綽の教判論とするのは妥当であるのか。この点に関する検討も加えた。その結果、道綽は「諸行」を易行道に入れることによって、難易二行道を比較する焦点を完全に行法から自他二力に移した。さらに、自力によって浄土に往生しようとするのも難行道になるということである。また、難易二行道は完全な教判とは言えない、そして、その目的は不退転に入るためであるから、道綽の浄土に往生する主旨を打ち出すことができない。従って、聖浄二門判という新しい教判を提示する必要があった。

キーワード：『安楽集』、道綽、難易二行道、自他二力、聖浄二門判

### はじめに

本論文では隋唐の時代に活躍した浄土教の禅師道綽の難易二行道について論じる。法然(1133～1212)は『選択本願念仏集』の第一章において道綽が聖道浄土二門を創立したと主張する<sup>(1)</sup>。それ以来、聖浄二門判は道綽の教判論として広く知られるところとなる。聖浄二門判に関して、先学たちは様々な論文を発表しているが、道綽の難易二行道に焦点を当てた研究は少ない。しかし興味深いことは最近杉山祐俊が発表した「道綽『安楽集』所説の難易二行道について」という論文では、「これまでの研究はあくまでも法然から見た道綽像、あるいは法然の『安楽集』理解を通して日本浄土教の立場から論じられたものが多く、そこには「道綽＝聖浄二門判」という共通の認識が見られるものの、道綽の教判を直ちに「聖浄二門判」と断定できるかどうかについては疑問が残る」という論旨を提示し、そこで曇鸞が提示する難易二行道と比較することを通して道綽の難易二行道を検討し、そして先学たちと異なる意見を提出し、

難易二行道こそが道綽の教判論であると指摘したことである<sup>(2)</sup>。

『安樂集』において、「聖浄二門」という用語は出てこないが、聖道教と浄土教との対立関係ははっきり見えると言える。では、聖浄二門と難易二行道とはいかなる関わりがあるのだろうか。そして従来の中国仏教は戒定慧の三学の実践を重視し、空理偏重の傾向になっているので、浄土教の彼土往生の思想を軽視する思潮となっていた<sup>(3)</sup>。道綽はこのような環境で、難易二行道という教判を扱うことによって、浄土教の独立を達成できたのだろうか。また聖浄二門判は果たしてただ法然から見たものであろうか。これらの問題を念頭において、とりあえず難易二行道について再考する必要があると思われる。

難易二行道は『安樂集』において明白に用いられるが、その先学である龍樹と曇鸞の難易二道判を継承したうえで、独自の思想を加えて、新しい特徴が成立したと考えられる。本論では、龍樹、曇鸞の教判思想と比較し、また、難易二行道における自他二力の内容も含めて検討することによって、道綽の難易二行道判を解き明かしたい。

## 一、衆生の機根に応じる難易二行道の提出

周知のとおり、道綽『安樂集』第一門において「明教興所由、約時被機、勸帰浄土。若教赴時機、易修易悟；若機教時乖、難修難入<sup>(4)</sup>」と説いているように、教法が時代と人間の素質、能力に応答するのは悟りを開く鍵になっている。即ち道綽は「教赴時機」が仏法における修行の重要な原則としていることがわかる。また「計今時衆生、即当仏去世後第四五百年、正是懺悔修福、応称仏名号時者。若一念称阿弥陀仏、即能除却八十億劫生死之罪。一念既爾、況修常念、即是恒懺悔人也<sup>(5)</sup>」と述べているように、今時の衆生は仏滅後の第四の五百年に当たり、懺悔・修福・称名をするべきであると強調している。さらに、第三大門の第三において衆生の機根に関して詳しく説明している。「如是輪廻六道、受苦樂二報、生死無窮<sup>(6)</sup>」、「故知惡道身多。何故如此。但惡法易起、善心難生故也<sup>(7)</sup>。」というように、衆生は惡法をよく造って、善い心を起こしにくいいため、いつも輪廻流転の状態になっていて、特によく惡道に墮落すると示す。そこで、輪廻を出離する方法として、「聖道」と「往生浄土」と二つの道を提出した。また「其聖道一種、今時難証。一由去大聖遙遠、二由理深解微。…当今末法、現是五濁惡世、唯有浄土一門可通入路<sup>(8)</sup>。」とあって、聖道一門を否定し、浄土一門をすすめる。このように、道綽は「教赴時機」の原則に準じて、教法と機根の相応性を重要視していると考えられる。

道綽は『安樂集』第三大門第一に難易二行道のことを引き出す前に、以下のように述べている。

第一、弁難行道、易行道者。於中有二、一出二種道、二問答解釈。

余既自居火界、実想懷怖。仰惟大聖三車招慰、且羊鹿之運、權息未達、佛呵邪執、障上求菩提、縱後廻向、仍名迂廻。若徑攀大車、亦是一途。只恐現居退位、險徑遙長、自德未

立、難可昇進。是故龍樹菩薩云、求阿鞞跋致有二種道、一者難行道、二者易行道<sup>(9)</sup>。

これは道綽が自らのことを省察し告白する文章である。今火宅のような娑婆世界に滞在することが本当に恐ろしいと表明し、また『法華經<sup>(10)</sup>』にある三車の比喩を引用し、自分の修行様相を呈している。三車は声聞、辟支佛、佛という三乗にたとえ、「羊鹿之運」というのは声聞、辟支佛のことである。仏はこの二乗を求めるのを邪執として、菩提を求めるのが邪魔になり、たとえ最後に大乘に振り向けるとしても、修行の道が遠回りになると注意を促している。その一方、直接に大乘を修行しようとしても、自分自身は功德がなく退転する状態になっており、さらに修行の道が長くて危ないので、結局昇進し難いと説いている。つまり、道綽は自分のことを功德なく愚痴な凡夫であると認知している。このような状況に対して龍樹菩薩は難易二行道を示すと指摘されている。しかし、その後の引用文は龍樹の原文ではなく、すべて曇鸞の文章である。それなのに、なぜ直接に曇鸞の名を表明しないのか、ここにはどのような意味があるのか。この問題を解決するために、龍樹の『易行品』において、難易二道を提出する由縁について確認したい。

龍樹は『易行品』において、難易二道を提出する由縁について、このように説いている。

問曰、是阿惟越致菩薩、初事如先説。至阿惟越致地者、行諸難行、久乃可得、或墮声聞、辟支佛地、若爾者、是大衰患。…（中略）菩薩亦如是、若於声聞地、及辟支佛地、心生大怖畏。是故若諸仏所説有易行道、疾得至阿惟越致地方便者、願為説之。答曰、如汝所説、是懦弱怯劣、無有大心、非是丈夫志幹之言也。何以故。若人發願、欲求阿耨多羅三藐三菩提、未得阿惟越致、於其中間、心不惜身命、昼夜精進、如救頭燃。…（中略）行大乘者、仏如是説、發願求仏道、重於拳三千大千世界。汝言阿惟越致地、是法甚難、久乃可得。若有易行道、疾得至阿惟越致地者、是乃怯弱下劣之言、非是大人志幹之説。汝若必欲聞此方便、今當説之<sup>(11)</sup>。

ここには阿惟越致地を証得することをめぐって設問している。阿惟越致地を証得するために、長い時間にわたって諸多の難行を行い、そして修行の途中、声聞、辟支佛地に墮ちる危険性があると指摘している。従って、もし易行道があれば、その修行方法を求める。龍樹は易行道を求める者に対して、まず「懦弱怯劣、無有大心、非是丈夫志幹之言」と厳しく叱責し、また精進者の様相を取り上げるが、身命を惜しまずに仏道に精進するように勧めるのではなく、それに反して、要求に応じて易行道を説かれた。すなわち、龍樹の本意は人々に易行道を説かれようとすると考えられる。では、「懦弱怯劣」、「非是丈夫志幹」という言葉から易行道を求める者の素質を見ると、これらの人々は自分の力が弱くて難行に堪えられない凡夫であることがわかる。

こうして、易行道は能力や素質が弱い凡夫に相応する修行道であると考えられる。曇鸞は難易二行道を詳しく説明しているが、衆生の機根と二行道の関係に対してあまり言及していない。従って、道綽は龍樹の名を提出する目的は主にその難易二行道の内容を引用するのではな

く、重要なのは難易二行道と行者の機根との関係を強調しているのではないか。このように、道綽は「教赴時機」の原則に基づいて、龍樹の名を借りて易行道こそ今時の衆生に相応する教法であることを表明すると考えられる。

## 二、龍樹と曇鸞における難易二行道について

周知のとおり、道綽の難易二行道は龍樹と曇鸞の難易二道判を継承したうえで発展してきたものである。従って、その特徴を解明するために、龍樹と曇鸞の難易二道判を分析する必要がある。

まず、龍樹は『易行品』において、難易二行道について以下のように説かれている。

至阿惟越致地者、行諸難行、久乃可得、或墮声聞、辟支佛地、若爾者、是大衰患。（中略）  
仏法有無量門、如世間道、有難有易、陸道歩行則苦、水道乗船則楽。菩薩道亦如是、或有勤行精進、或有以信方便、易行疾至阿惟越致者。（中略）若人欲疾至、不退転地者、応以恭敬心、執持称名号。若菩薩欲於此身得至阿惟越致地、成就阿耨多羅三藐三菩提者、应当念是十方諸仏、称其名号<sup>(12)</sup>。

この文から龍樹の難易二行を概観すると、この二つの修行方法は同じく不退転地に入るための行であるが、難行道は長い時間にわたって諸々の難行を行う道であり、しかも、修行の途中、声聞、辟支佛地という小乗の境地に墮ちる危険性が伴う。その一方、易行道は恭敬心を込めて、仏の名号を称えることによって早く不退転地に入ることができる道である。即ち、龍樹は時間（久一疾至）、行法（諸行一称名号）、安全性（墮落一成就）の三方面から難易二行道を対比している。その結果としては、難行道は陸道で歩行するような困難な方法であり、易行道は水道で船に乗るような安楽な方法であるということになる。

次に、曇鸞は『往生論註』の冒頭には難易二行道について、以下のように述べている。

謹案龍樹菩薩『十住毘婆沙』云、菩薩求阿鞞跋致、有二種道。一者難行道、二者易行道。難行道者、謂於五濁之世、於無仏時、求阿鞞跋致為難。此難乃有多途、粗言五三、以示義意。一者外道相善、乱菩薩法。二者声聞自利、障大慈悲。三者無頼惡人、破他勝德。四者顛倒善果、能壞梵行。五者唯是自力、無他力持。如斯等事、触目皆是。譬如陸路、歩行則苦。

易行道者、謂但以信仏因縁、願生浄土、乗仏願力、便得往生彼清浄土、仏力住持、即入大乘正定之聚。正定即是阿鞞跋致。譬如水路、乗船則楽<sup>(13)</sup>。

曇鸞は龍樹の難易二行道を継承したうえで、難易の原因をより詳しく指摘している。「五濁之世」という社会環境と仏が存在しない時代において、阿鞞跋致を求めるためにはたくさんの困難がある、そのうち、五つの困難の因素を取り上げている。

第一には外道の説く善法が菩薩の修する善と乱し、混乱を招くという難。



第二には声聞は自己のみの悟りを求めるため大慈悲を妨げるという難。

第三には自らの悪を反省しない者は他人の勝れている徳を破壊するという難。

第四にはあらゆる人天は悪を善とし、善を悪とするような、顛倒なことをし、本当の清浄な修行を破壊する難。

第五には仏道を求めても自力のみを頼み、他力を頼むことがないという難。

このような困難があるから、難行道になる。その一方、易行道とは仏を信じる因縁によって、浄土に願生すれば、仏の願力に乗じて、即ち浄土に往生し、また仏力の住持があるため阿鞞跋致を得ることができるということである。このように、難行道の困難の理由がたくさんあるが、易行道の易行さの原因にはただ一つある、それは仏願力である。つまり、難易二行道の区別は仏の願力を頼むことがあるかどうかということである。

また、「信仏因縁」に関して、藤堂恭俊は「信仏の因縁とは具体的には、阿弥陀仏の本願成就の聖意とそのはたらきを信じ（往生の信因）、その聖意のままに阿弥陀仏のみ名を称念し（往生の行因）、その大願業力のはたらきを増上縁（往生の縁）とすることによって往生できるから、阿弥陀仏の在す清浄の土において、速やかに大乘正定聚（不退転）を体得できる、という他力易行道を選び取るに至った」と指摘されている<sup>(14)</sup>ように、「信仏因縁」には易行道の行法が阿弥陀仏の名を称えるということが含まれている。龍樹が明白に易行の行法（称名号）を提出したことに対し、曇鸞はその易行の原因（仏願力）に注目していたことは重要である。

### 三、道綽の難易二行道について

道綽は二人の先学の思想を継承したうえで、新たな特徴を提示していると考えられる。難易二行道について、主に『安樂集』の第三大門と第五大門において述べられているので、この二大門を中心として論述を展開しようと思う。

『安樂集』第三大門において、道綽は曇鸞の難易二行道説を引用し、以下のように説いている。

是故龍樹菩薩云、求阿鞞跋致、有二種道。一者難行道、二者易行道。言難行道者、謂在五濁之世、於無仏時、求阿鞞跋致為難。此難乃有多途、略述有五。何者。一者外道相善、乱菩薩法。二者声聞自利、障大慈悲。三者無顧惡人、破他勝徳。四者所有人天顛倒善果、壞人梵行。五者唯有自力、無他力持。如斯等事、触目皆是。譬如陸路、歩行則苦、故曰難行道。

言易行道者、謂以信仏因縁、願生浄土、起心立德、修諸行業。仏願力故、即便往生。以佛力住持、即入大乘正定聚。正定聚者、即是阿鞞跋致不退位也。譬如水路、乗船則楽、故名易行道也<sup>(15)</sup>。

この文から見ると、道綽は難行道の内容をそのまま引いているが、易行道には「起心立德、

修諸行業」という八文字を加え、あらゆる行法を修行して願力によって往生できると説くのである。つまり、易行道の行法は阿弥陀仏の名号を称えるだけではなく、いかなる行法でも往生できると拡大解釈している。従って、道綽は第六大門において「故知一切行業但能廻向、無不往也<sup>(16)</sup>」といい、すべての行法を浄土に廻向すれば、往生できると認めている。このように、「諸行」を易行道に入れることによって、道綽は難易二行道の区別する焦点は完全に行法から自他二力に移ると言えるだろう。

また、三師の難易二行道を論じたところから見ると、難易二行道の目的は同じく不退転地に入るためである。しかし、杉山祐俊は「道綽にとって易行道の主たる目的は仏の教えに従って浄土に往生することであり、難行道と易行道を区別する基準は往生の難易性にあると考えられる<sup>(17)</sup>」と指摘している。もしそうであれば、易行道の目的は浄土に往生すると限定するだけであり、また難易二行道は一代仏教に対する教判論ではなく、浄土教内部の細判であることになる。この結論に対して、筆者は賛同することができない。

道綽は第五大門第一において『菩薩瓔珞本業經』を引用し、難易二行道の修道延促を説明されている。

明延促者、但一切衆生、莫不厭苦求楽、畏縛求解、皆欲早証無上菩提者、先須發菩提心為首。此心難識難起、縱令發得此心、依經終須修十種行、謂信、進、念、戒、定、慧、捨、護法、發願、廻向、進詣菩提。然修道之身、相續不絶、逕一万劫、始証不退位。当今凡夫、現名信想輕毛、亦名不定聚、亦名外凡夫、未出火宅。扱『菩薩瓔珞經』、具辨入道行位法爾、故名難行道。又、但以一劫之中受身生死、不可数知、況一万劫中徒受痛燒。若能明信仏經、願生浄土、隨寿長短、一形即至、位階不退、与此修道一万劫齊功。諸仏子等、何不思量、不捨難求易也<sup>(18)</sup>。

ここには同じ目標を達成する前提として、難行道と易行道の修行時間を比較している。この文から見ると、『菩薩瓔珞本業經』における入道の階位の判断標準によって、難行道では此土で諸行を修行し不退転地に入る必要な時間が一万劫であり、その一方、易行道では浄土に往生し、不退転地に入る時間はただ一期の寿命である。すなわち、難易二行道の目標は同じく不退転地に入るためであるが、時間には一万劫と一生の寿命との違いがある。そして、難行道は此土で修行するのにによって不退転地に入るのに対して、易行道は浄土へ往生することを通して不退転地に入るということである。従って早く不退転地に入るために、まずは浄土へ往生すべきだと強調されているのではないか。

このように、浄土に往生するのは易行道の目的に達成するそのルートである、つまり、往生浄土は易行道そのものであり、目的ではないと考えられる。また、道綽は第二大門において「但至彼国、即一切事畢、何用争此深淺理也<sup>(19)</sup>」といい、ただ浄土に往生したら、すべてが成就できると主張され、即ち、浄土に往生するのは衆生の第一要務であると考えられる。したがって、不退転地に入るという目標はとりあえず、第二位に下がって、浄土に往生すると勧める

のは道綽の本当の意図であると読み解かれるだろう。そもそも道綽は第一大門の冒頭に「此『安樂集』一部之内、総有十二大門、皆引經論証明、勸信求往<sup>(20)</sup>」と述べ、この『安樂集』の主旨は信心を起こし、浄土に往生しようと勧進すると表明している。

また、道綽は第五大門に『俱舍論』を引用し、難易二行道を説明している。

如『俱舍論』中、亦明難行、易行二種之道。難行者、如『論』説云「於三大阿僧祇劫、一一劫中、皆具福智資糧、六波羅蜜一切諸行。一一行業、皆有百万難行之道、始充一位、是難行道也。易行道者、即彼『論』云若由別有方便有解脫者、名易行道也<sup>(21)</sup>」。

道綽は『俱舍論』を引用し難行、易行二道を示している。解脫するために、三大阿僧祇劫において一一劫の間に福德と智慧の功德や六波羅蜜などのもろもろの諸行を行うことを備えなければならない。しかし、一一の行業において百万の難しい行法があり、この百万の難しい行法を完成してこそ、菩薩階位の一位に達成できる。従って、三大阿僧祇劫にわたって五十二位の菩薩階位を完成することは難行道である。その一方、別の手段によって解脫するのは易行道である。しかし、『俱舍論』の原文を比較すると、「易行道」という言葉がない。

如此大劫、次第数至第六十处、説名一阿僧祇。度一更如此数名第二、第三亦爾、故説三阿僧祇。非一切方便所不能数、故名阿僧祇。衆生先已發願、云何復須此最長時修行、方得無上菩提。如此事云何不応有。何以故。由大福德智慧資糧行、由六波羅蜜百万難行道、於大劫三阿僧祇中、無上正覺果諸菩薩方得。若由別方便有解脫理、何用久修此大難行道。為他故須如此大功用。云何我等從大苦流、有能為拔濟他。由此意故久劫修行<sup>(22)</sup>。

ここには「難行道」という名目があるが、相対的な名称である「易行道」がない。原文には「若し別の方便によって解脫の道理があれば、なぜ長くこの大難行道を修するや、いや、いらぬ」と述べられ、別の方便による解脫する道と難行道との対立の関係を明らかにする。即ち、道綽は原文における別の方便による解脫する道を易行道としていることがわかる。

しかし浄影慧遠は難易二行道に関して別の意見を示している。『大乘義章』卷十一において、以下のように論述されている。

四種道義出阿含經、毘曇成実具広分別。名字是何。一苦難行道、二苦易行道、三樂難行道、四樂易行道。此之四種論積不同。依如毘曇人有利鈍、定有根本方便之別。以人依定故分四種、是義云何。如彼中釈、利根之人所行名易、易成就故。鈍根之人所行名難、難成就故。定中四禪是其根本、根本具支、作用自在名為樂道。未來中間是其方便、方便定中支因不具、用不自在名為苦道。鈍人依於方便之定名苦難行、利人依於方便之定名苦易行。鈍人依於四根本禪名樂難行、利人依於四根本禪名樂易行。成実法中難易如上<sup>(23)</sup>。

浄影は衆生の修行方法には四種類があると指摘し、それは苦難行道、苦易行道、樂難行道、樂易行道である。人の能力の強弱によって行法の難易性を区別し、また、根本と方便という禪定の修行方法によって苦樂を決める。即ち、能力の低い人が方便の禪定によって修行するのは苦難行といい、能力の高い人が方便の禪定によって修行するのは苦易行という。また、能力の

低い人が四根本の禪定によって修行するのは楽難行といい、能力の高い人が四根本の禪定によって修行するのは楽易行という。このように、能力の低い人が禪定によって修行するのは難行であり、その一方、高い能力を持つ人は禪定によって修行するのは易行であると考えられる。

つまり、難易行を区別する標準について、浄影は衆生側によって判断されているが、その一方、道綽は阿弥陀仏側によって判別されている。また「方便」に対する理解も大きな違いを認められる。浄影は方便の禪定には解脱する因素を揃えていないから、苦道であると主張され、逆に道綽は「別の方便」、即ち他力によって解脱できると提唱している。このように、道綽と諸師との不同は自他二力の立場が違うという原因によるものであると言えるだろう。

こうして、諸師には難易二行道という思想もあるから、道綽の時代において、この教判は浄土教に対して特有性と鮮明性がなくなってしまうと考えられる。そして、単に難易二行道という名目から見ると、此土得証か彼土得証かを区別されないから、道綽はこの教判を用いても、浄土教を独立させ、衆生に浄土へ往生させようと勧進するのは説得力が足りないと考えたのであろう。

また、上述したように、難易二行道の目標は不退転地に入り、菩提を得るということである。しかし、『安樂集』を著す道綽の本当の意図は直接に不退転に入る目的を設定しているのではなく、衆生に浄土へ往生しようと勧めることである。このようなわけで、道綽は難易二行道判を引用しているが、聖浄二門判という新しい教判を下さなければならなかったと考えられる。つまり、聖浄二門判はただ法然から見たものではなく、道綽の本意であると考えられる。聖浄二門判について、今後詳しく論述したいと思う。

ここでは、龍樹と曇鸞の難易二行道を詳細に比較したところ、道綽の難易二行道の特徴を以下の四点にまとめることができただろう。

- 一、難易二行道は衆生の機根に応じて提示される教判であることを強調すること。
- 二、難易二行道の区別する焦点は完全に行法から自他二力に移る、即ち難易二行道を区別する標準は行法ではなく、他力の有無であること。
- 三、難行道は一万劫にわたって不退転に入り、その一方、易行道はただ一期の寿命の中で不退転に入ることができるという時間的に比較することによって、難易二行道の違いはより具体的、直観的に見えること。
- 四、浄土に往生することによって不退転に入るのは易行道であるが、道綽の当時緊迫した要務は往生浄土であるから、浄土教を鮮明に表す新たな教判を下さなければならない。こうなると、浄土門は易行道であるが、易行道は完全に浄土門とは言えないと示唆されること。

次に自他二力は道綽の難易二行道において重要な役割を果たしているので、これから自他二力を詳述してみたい。



#### 四、曇鸞『往生論註』における自他二力について

自他二力は曇鸞が初めに提唱したものであり、『安樂集』において道綽はそのまま引用しているのではない。まず、道綽の自他二力を理解するために、曇鸞の自他二力を解明しなければならない。曇鸞は『往生論註』の末尾において、十八願、十一願、二十二願という三願を取り上げて、他力を説明している。

問曰、有何因縁、言速得成就阿耨多羅三藐三菩提。答曰、『論』言修五門行、以自利利他成就故。然覈求其本、阿弥陀如来為増上縁。他利之与利他、談有左右。若自仏而言、宜言利他。自衆生而言、宜言他利。今將談仏力、是故以利他言之、当知此意也。凡是生彼浄土、及彼菩薩、人天所起諸行、皆縁阿弥陀如来本願力故。何以言之。若非仏力、四十八願便是徒設。今取三願、用証義意<sup>(24)</sup>。

何の因縁があつて、速やかに菩提が成就できるのかという問いに対して、一往、五念門を修行し、自利利他を成就するからと回答しているが、本当の原因をたどると、阿弥陀仏の願力によるからであると主張している。おおよそ浄土に往生すること、及び往生した菩薩や人天が行われる諸行はすべて阿弥陀如来の本願力によって成就できるのであるとして、阿弥陀仏の本願の働きを強調している。また、本願力によって速やかに菩提を成就するのを証明するために、わざわざ三願を取り上げている。

願言、設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我国、乃至十念、若不得生者、不取正覺。唯除五逆、誹謗正法。縁仏願力故、十念念仏、便得往生。得往生故、即免三界輪廻之事、無輪廻故、所以得速。一証也。

願言、設我得仏、国中人天、不住正定聚、必至滅度者、不取正覺。縁仏願力故、住正定聚、住正定聚故、必至滅度、無諸廻復之難、所以得速。二証也。

願言、設我得仏、他力仏土諸菩薩衆來生我国、究竟必至一生補處、除其本願自在所化、為衆生故被弘誓鎧、積累德本度脱一切、遊諸仏国修菩薩行、供養十方諸仏如来、開化恒沙無量衆生、使立無上正真之道。超出常倫諸地之行、現前修習普賢之徳。若不爾者、不取正覺。縁仏願力故、超出常倫諸地之行、現前修習普賢之徳、以超出常倫諸地行故、所以得速。三証也<sup>(25)</sup>。

第十八願によって、十念念仏して往生できる。そして浄土に生まれたことを通して三界輪廻を避けられるので、速やかに菩提を得る。第十一願によって浄土に往生した衆生は不退転地に入ることができる。またこのことによって、退転する危険がないため、速やかに菩提を得る。さらに第二十二願によって浄土に往生した衆生は一般的な諸地の増進のルールを守る必要がなく、早く菩提を取ることができる。つまり、第十八願において往生できる原因を示し、また第十一願と第二十二願には往生した証果を述べていることが分かる。このように、往生前後のす

すべてのことはいずれも弥陀仏の他力によって完成されたことであると考えられる。しかし、注意すべきはここに曇鸞が証明したのは仏願力によって早く菩提を得ることができるということである。

また、曇鸞は自他二力の様相を説明するために、以下のような譬えを引用している。

当復引例、示自力他力相。如人畏三途故、受持禁戒。受持禁戒故、能修禪定。以禪定故、修習神通。以神通故、能游四天下。如是等名為自力。又如劣夫、跨驢不上、從轉輪王行、便乘虚空遊四天下、無所障礙、如是等名為他力。愚哉、後之學者、聞他力可乘、當生信心、勿自局分也<sup>(26)</sup>。

ここから見ると、自力とは自分の力であり、即ち衆生自らの修行能力を指すのである。また、劣夫とは修行能力がない人であり、轉輪王とは他力の持つ主である。劣夫は轉輪王に完全に頼ることによって、自力で修行できる人のように四天下を遊ぶことができる。即ち、他力とは修行能力がない人に対して、証果を獲得する全部の助力であり、そして、この助力は人類の力を超越する存在である。ここでは阿弥陀仏の本願力を指している。つまり、自力と他力とは対立の関係であるが、平等の関係ではないと考えられる。従って、曇鸞は未来の衆生に信心を起こして、他力によって浄土に往生しようと勧める。

このように、そもそも五念門を修行することによって速やかに菩提を得ると結論付けているが、その根源をたどると、人類の自力を超越する仏力を頼むからである。

次に、道綽の自他二力を検討してみたい。

## 五、道綽『安樂集』における自他二力について

道綽は『安樂集』の第三大門において、以下のように述べている。

問曰、菩提是一、修因亦應不二。何故在此修因向佛果、名為難行。往生浄土期大菩提乃名易行道也<sup>(27)</sup>。

ここに道綽は問題を提起している。なぜ此土で因行を修し仏果を求めるのは難行道であり、浄土に往生し菩提を得るのは易行道であるのかと。この問題から見ると、難易二行道の異なるところが二つある。一つは修因の違いであり、もう一つは菩提を得る場所、つまり此土と浄土との違いである。

さらに、道綽はその回答として、以下のように説いている。

答曰、諸大乘經所弁、一切行法皆有自力他力、自摂他摂。何者自力、譬如有人怖畏生死、發心出家、修定發通、游四天下、名為自力。何者他力、如有劣夫以己身力、擲驢不上。若從輪王、即便乘空、遊四天下、即輪王威力、故名他力。衆生亦爾、在此起心立行、願生浄土、此是自力。臨命終時、阿弥陀如来光台迎接、遂得往生、即為他力。故『大經』云、「十方人天、欲生我国者、莫不皆以阿弥陀如来大願業力為増上縁也。」若不如是、四十八願

便是徒設。語後學者、既有他力可乘、不得自局己分、徒在火宅也<sup>(28)</sup>。

上述した問いに対して、道綽は一切の行法には自力他力、自摂他摂があると答えている。この回答には二土の違いにかかわらず、ただ自力他力、自摂他摂というのを示している。つまり、道綽は難易二行道を区別する標準が彼此二土で証果を得るのを中心とせず、自他二力こそ重要な判断方法であると考えている。

次に『往生論註』の比喩を引用し、自力他力の様相を説明している。また、引き続き「衆生亦爾、在此起心立行、願生淨土、此是自力。臨命終時、阿弥陀如来光台迎接、遂得往生、即為他力」と述べている。ここに注意すべきことは「衆生亦爾」という言葉が何を意味しているのかということである。「衆生はまたこのようである」といっているが、一体どのようなものか。難行道の「何者自力」と易行道の「何者他力」との二つの比喩を指しているのか、或は「何者他力」の一つの譬えのみを指しているのか。

杉山裕俊は「この一文は易行道における往生の過程を自力・他力によって説明した箇所である」と指摘され、そこで、「道綽は易行道を単に他力他摂の法門と規定しているわけではなく、そこには自力と他力の両面があることを明らかにしている。すなわち、『安樂集』における易行道とは、現生で菩提心を発し、往生淨土を願いながら仏道修行を实践すること（自力）と、臨終時に阿弥陀仏の来迎（他力）によって淨土へ往生するという二つの過程を経て成立する者であり、道綽は自力、他力を対概念としてではなく、一つの連続した関係にあるものと捉えている<sup>(29)</sup>。」と結論付けたが、筆者はこれに賛成することができない。

「何者自力」という譬喩では、此土で自力によって諸行を修行し成仏することを譬えているので、淨土を求めるのではない。そうすれば、「在此起心立行、願生淨土、此是自力」と述べることに矛盾がある。従って、「衆生はまたこのようである」といっていることは「何者他力」という譬喩において譬えていることのみを指していると考えられる。実は「何者他力、如有劣夫以己身力、擲驢不上。若從輪王、即便乘空、遊四天下、即輪王威力、故名他力」という譬喩は『安樂集』においても一か所に出てくる。それは第二大門の第三「広施問答」において、一切万法の自力他力、自摂他摂のあることを説明する七つの比喩の中の一つである<sup>(30)</sup>。

この比喩を詳細に分析すると、「如有劣夫以己身力、擲驢不上」とは衆生は自力によって、驢にすらのぼることができない。ここには道綽は曇鸞がない「以己身力」の四文字を加えて、自他二力の対比を強調されているのではないか。衆生は自力によって驢にすらのぼることができないのに、此土で自力によって修行し淨土に往生しようとするのは、できるわけがないだろう。従って、道綽は「衆生亦爾、在此起心立行、願生淨土、此是自力」と述べ、衆生が此土で心を起こし修行して、淨土に願生するのが自力、自摂のことであり、往生淨土を成就できないと示唆している。

また譬喩の後半では「若從輪王、即便乘空、遊四天下、即輪王威力、故名他力」といい、もし輪王によれば、即ち空に昇って、四天下を遊ぶことができる、この輪王の威力は他力である

と示している。即ち、この比喩を以って、「臨命終時、阿弥陀如来光台迎接、遂得往生、即为他力」と譬えて、命が終わる時、阿弥陀仏が迎えに来ることによって遂に往生できる、この阿弥陀仏の願力は他力であると示されている。即ち他力、他摂こそ往生できる要因であると主張されている。

このように、此土で自力によって修行し浄土に往生するのも難行道になり、易行道とは言えない。しかし、一期の生命が終わる時、阿弥陀仏の本願力に乗って浄土に往生できれば、他力易行道になる。また、劣夫の比喩と合わせて考えると、平生で自力によって修行できるかできないかにはかかわらず、臨終の時に弥陀の教えを信じて本願力（他力）に乗って往生するのは、易行道であるというのが道綽の考え方なのではないか。

また、周知のとおり、自力によって此土で仏果を得るのは難行道である。しかし、従来自力で浄土に往生しようとするのは易行道であるか、難行道であるかについて先学たちは全く言及されてなかった。道綽はこのことを気づき、わざわざ「在此起心立行、願生浄土、此是自力」という表現を用いられ、自力で浄土に往生しようとするのも難行道であると表明したのであろう。

後に「故『大經』云、十方人天、欲生我国者、莫不皆以阿弥陀如来大願業力為増上縁也。」と述べて、浄土に往生しようとするのは阿弥陀仏の大願業力によらなければならないと強調している。ここには、曇鸞のように三願を取り上げて本願力を強調するのではなく、ただ浄土へ往生するということに集中し、本願力を提唱するのは、やはり他力によって浄土に往生するのは衆生の第一要務であることを強調しているのではないか。

曇鸞の自他二力と比較したところ、道綽の自他二力は同じく対立の関係を持つのであるが、自力によって修行し此土で菩提を得るのは難行道とするのだけではなく、此土で自力によって修行し浄土に往生するのも難行道であると主張されている。つまり、難行道では彼此二土での証果と関係なく、ただ自力によって修行するのは自力難行道であると考えられる。

## おわりに

本論では、龍樹、曇鸞の難易二行道の思想を比較することによって道綽の難易二行道を解明してきた。道綽の易行道では龍樹のように単一の称名念仏を指すのではなく、「諸行」も含めて易行道の修行方法として広げていく。また、道綽は「諸行」を易行道に入れることによって、難易二行道を比較する焦点を完全に行法から自他二力に移した。さらに、道綽の自他二力を検討したところ、難行道に対する新しい見解を見つけた。それは、自力によって浄土に往生しようとするのも難行道になるということである。また、難易二行道は自他二力によって対立の関係が成立した。そして、浄土に往生しようと勧進するのは道綽が『安樂集』を著作した最重要目的であることがわかるようになった。しかし、道綽の難易二行道において、難行道と易



行道との行法は同じく、諸行であるので、完全な教判とは言えない。そして、難易二行道の目的は不退転に入るためのであるから、道綽の浄土に往生する主旨を打ち出すことができない。従って、聖浄二門判という新しい教判を提示する必要があった。

〔注〕

- (1) 『大正蔵』 八三、一頁中
- (2) 杉山裕俊「道綽『安樂集』所説の難易二行道について」(『浄土学』 四六、二〇〇九年) 二四九頁参照
- (3) 山本佛骨『道綽教学の研究』(京都・永田文昌堂、昭和三四年) 一～四九頁参照
- (4) 『大正蔵』 四七、四頁上
- (5) 『大正蔵』 四七、四頁中
- (6) 『大正蔵』 四七、一三頁上
- (7) 『大正蔵』 四七、一三頁中
- (8) 『大正蔵』 四七、一三頁下
- (9) 『大正蔵』 四七、一二頁中
- (10) 『大正蔵』 九、一三頁下『妙法蓮華經』 卷第二 「舍利弗。如彼長者初以三車誘引諸子。然後但與大車寶物莊嚴安隱第一。然彼長者無虚妄之咎。如來亦復如是。無有虚妄。初説三乘引導衆生。然後但以大乘而度脱之。何以故。如來有無量智慧力無所畏諸法之藏。能與一切衆生大乘之法。但不盡能受。舍利弗。以是因縁。當知諸佛方便力故。於一佛乘分別説三。」
- (11) 『大正蔵』 二六、四一頁上、中
- (12) 『大正蔵』 二六、四一頁上、中
- (13) 『大正蔵』 四十、八二六頁上、中
- (14) 藤堂恭俊・牧田諦亮『曇鸞・道綽』(『浄土仏教の思想』 四、講談社、一九九五年) 六九頁参照。
- (15) 『大正蔵』 四七、一二頁中
- (16) 『大正蔵』 四七、一八頁中
- (17) 杉山裕俊「道綽『安樂集』所説の難易二行道について」(『浄土学』 四六、二〇〇九年) 二四四頁参照。
- (18) 『大正蔵』 四七、一六頁中、下
- (19) 『大正蔵』 四七、九頁上
- (20) 『大正蔵』 四七、四頁上
- (21) 『大正蔵』 四七、一六頁下
- (22) 『大正蔵』 二九、一三一頁中
- (23) 『大正蔵』 四四、六八三頁中
- (24) 『大正蔵』 四〇、八四三頁下
- (25) 『大正蔵』 四〇、八四四頁上
- (26) 『大正蔵』 四〇、八四四頁上
- (27) 『大正蔵』 四七、一二頁中
- (28) 『大正蔵』 四七、一二頁中、下
- (29) 杉山裕俊「『安樂集』における自力・他力について」(『印度学仏教学研究』 一二五、二〇一一年) 四十頁参照
- (30) 『大正蔵』 四七、一〇頁下

(おう しんけん 文学研究科仏教学専攻博士課程)

(指導教員： 齊藤 隆信 教授)

2020年9月23日受理